

スペイン語と日本語における形容詞カテゴリーの展望

岡見 友里江

Yurie OKAMI

0. はじめに

品詞または語彙クラス（動詞、名詞、形容詞）は言語の分析・研究において基本的な単位を成し、その存在はほとんど自明とされている。しかしながら、実際にその定義について、通言語的に有効なものは類型論においてまだ確立していない。中でも形容詞は、Dixon(1982)以来、名詞と動詞との間で揺れ動く、最も流動的なカテゴリーであるとされている。本稿ではまず、品詞定義の類型論研究を概観し、プロトタイプによる定義を仮定する。その後スペイン語と日本語の形容詞を取り上げ、これらの名詞的または動詞的な性質が具現化される幾つかの例を提示し、形容詞は通言語的にも流動的であるが個別言語内でも流動的であるという、二重の意味での流動性を主張する。最後に、類型論的な形容詞の研究は、言語獲得研究における、子供の語彙カテゴリーの獲得期に観察されるエラーについての研究においても重要な示唆を持つことを示す。

1. 品詞定義の難しさとプロトタイプ

品詞とは何かという問いに対する最も安易な答えは、動詞は出来事や動作、名詞は物や人の名前、形容詞は状態や性質を表す、といった意味的な定義であろう。しかしこの意味と品詞の対応はある程度まで有効であるが完全に正しいわけではなく（影山 2009）、例えば状態を表す動詞 (*saber, estar*)、動作を表す名詞 (*movimiento, explosión*)、性質を表わさない形容詞 (*mismo, mero*) など反例は枚挙に暇がない。そのため品詞定義は意味以外に形態、統語などを考慮に入れて複合的に行なわれるのが一般的である。これらの基準は概略以下のようにまとめることができる。

(1) 形態的基準

名詞：格、単複形、名詞クラスのいずれか、あるいはその全部で屈折する要素

形容詞：程度を表す語尾変化がある要素 (*happier, happiest*)

動詞：人称、数、テンス、ムード、態のいずれか、あるいはその全部で屈折する要素

(2) 統語的基準

名詞：冠詞、指示詞、関係節によって修飾が可能な要素

形容詞：程度を表す副詞 (*very, muy, etc.*) によって修飾が可能な要素

動詞：文の述部となる

しかしながら、これは基準を羅列しただけで、通言語的に有効な定義とはいえない。例えば日本語の

名詞には性・数の区別はないし、冠詞も存在しない。中国語はなんら形態的变化を伴わずに品詞が交替する。また、スペイン語（や日本語）の形容詞には（英語のような）程度を表す語尾（-er, -est）は存在しないし、程度副詞と共に起しないものも多い（*mismo, mero, municipal, etc.*）。¹ つまり通言語的に品詞を定義しようとする、かなり入念な、詳細を極めたものにする必要があり、これまでのところ確固たる定義は確立していないのが現状である。

このような状況に対し、類型論において提案されたのがプロトタイプ(prototype)という概念である。これは元々Givón(1979)に端を発するが、おおまかに言えば、品詞を含む、ある種の言語現象はプロトタイプを中心に連続体を成すというものである(Hopper & Thompson 1980, Comrie 1989, 角田 1991)。つまり、各言語の品詞体系は異なっても、一般的にはそれぞれの品詞と結びつきやすい意味と機能（命題行為）があり(Croft 2001)、品詞定義を段階性で捉えようという考えである。²

品詞定義のプロトタイプについては、Beck (2002)に従い、そのプロトタイプの基準から形態的特徴を外して、統語機能と意味の二点から行なうことが妥当だと思われる。これは語彙にコード化された屈折や一致のカテゴリーは、非常に個性の高い特徴であり、ほとんどその言語に固有の特徴と言えるからである。例えばスペイン語の名詞は、数の他に文法性の区別があるが（*niño-niña-niños-niñas*）、日本語の名詞には性・数の区別はない（一本の木 - 十本の木）。屈折や一致といった形態的特徴は定義としてではなく、ある個別言語内のある要素がどの品詞に属するかを調べるための診断基準のひとつと考えるのが適切であろう。ここで、Givón (1979), Croft (2001), Beck (2002)を参考に、品詞のプロトタイプを以下のように仮定する。

(3)

	統語機能	意味と時間的安定性
名詞	ある対象を命名し、指示する 述部の項となる	モノ、人、概念など具体的・抽象的な対象 時間的に最も安定
形容詞	名詞(句)を直接的に修飾する 一つの項を要求する	特徴・状態・性質を表す 時間的に名詞と動詞の間
動詞	文の述部となる (一つ以上の) 項を要求する	動作、出来事を表す 時間的に最も不安定

(3)はあくまでそれぞれの品詞のプロトタイプの仮定なので、統語環境などが整えばそれ以外の意味と機能の具現化も可能である。例えば日本語の形容詞はコンピュータがなくてもそれ自身で特徴を表す述部となれる。また、英語やスペイン語でも名詞による名詞の直接修飾は（生産性の違いはあるが）可能であるし(*Casa Campo, pocket dictionary, etc.*)、動詞も関係節化されれば名詞を修飾することができる。ここで重要な点は、非典型的なものもその体系に収めることで裾野を広くし、より多くの言語現象に

ついてプロトタイプを中心に記述することができるということである。³

3. 動詞・名詞の普遍性と形容詞の流動性

人間の言語には必ず名詞と動詞が存在し、これは類型論の中でも含意関係を含まない絶対的普遍性の一つである(Comrie 1989, Whaley 1997, Beck 2002)。この二つの品詞はそれぞれ、言語コミュニケーションの根源的な機能(現実世界の存在物に対しに命名・指示すること、そうした存在物の振る舞いや性質を記述すること)を担う。前節でみたようにこれらの機能は、典型的に名詞と動詞として具現化され、従って人間言語は普遍的にこれらの名詞と動詞を備えていると考えることができる(Moreno Cabrera, 1995)。

それでは形容詞も人間言語に普遍的な品詞カテゴリーであろうか。ある言語では形容詞は、限定詞や接続詞などと同様、閉じたクラスを成し、そのメンバーの数にも違いがある(イボ語の8、ハウサ語の12、スワヒリ語の50語程度から、日本語の数百個まで)。しかし、ごくわずかの閉じた形容詞しか持たない言語でも、その形容詞の意味内容は恣意的ではなく、大小、新旧、色、長短、価値判断など、ある一定のパターンがある(Dixon 1982)。このことから形容詞は言語によって多様な具現化を持つが、品詞としてはある一定の普遍性があることが窺える。

閉じたクラスの、数少ない形容詞を持つ言語では、英語などで形容詞として表される概念は名詞または動詞に同化してしまう。つまり形容詞は一方を名詞、もう一方の端を動詞と接している。(4)は名詞的な形容詞のケチュア(Quechua)語、(5)は動詞的なユラク(Yurak)語の例である。

- | | |
|--|---|
| (4) a. rikaška: alkalde -ta
see.PST.1SG mayor-ACC
'I saw the mayor' | b. rikaška: hatun -ta.
see.PST.1SG big -ACC
'I saw the big one' (Croft, 2001) |
| (5) a. jííē+Ø+ś
live+3SG;PST
'he lived' | b. sawo+ Ø+ś
good+3SG+PST
'he was good' (Beck, 2002) |

(PST=past, SG=singular, ACC=accusative case)

(4b)では対格を表す *-ta* が直接、形容詞に付いて項として名詞的に、(5b)では三人称単数形と時制を表すマーカが直接、形容詞に付いて述部として動詞的に振舞っている。このように、形容詞は通言語的に動詞と名詞の間で揺れるカテゴリーなのである。以下ではスペイン語や日本語などの個別言語内での形容詞の流動性をみていく。ここでは、様々なタイプの形容詞の内、よりプロトタイプに近い品質形容詞について、形容詞の名詞修飾と、述部としての機能を主に検討していく。

4. スペイン語の形容詞カテゴリー

スペイン語でも日本語でもプロトタイプ的な形容詞は、特徴（状態や性質）を表し、名詞句内で名詞を直接的に修飾する。しかしながら個々の用法を詳察していくと、形容詞でありながらもより動詞的・名詞的な機能を持ち、それらが目に見える形で発現していると考えられる例がある。

まずは形容詞のプロトタイプ機能である名詞内修飾から見ていこう。スペイン語に限らず一般的に、名詞内修飾における、形容詞と名詞とが結ぶ意味関係には、少なくとも二つある。一つは、名詞と形容詞の間にコピュラ（またはコピュラを伴う関係節化）でパラフレーズできる叙述関係、もう一つは、副詞的な叙述関係で、形容詞が、名詞の語彙的・辞書の意味よりも広く想定される意味を修飾するものである。Taylor (1992)では、前者を絶対的 (absolute) 解釈、後者を総合的 (synthetic) 解釈としており、絶対的解釈とは *This is AB* といった場合に、*This is A* 且つ *This is B* が成り立つもので、総合的はそれ以外の解釈であるとしている。例えば *John is an old friend* という文で、*John is old* であり、且つ *John is a friend* という図式が成り立つ絶対的 (absolute) な解釈と、*John is a friend of long standing* といったような、統合的 (synthetic) な解釈の (少なくとも) ふたつがある。総合的な解釈は名詞と形容詞との間に、より広汎で複雑な意味関係を要求するので、副詞的な修飾関係であるといえる。

さて、この解釈の違いは英語などでは形式的に具現しないが、⁴ スペイン語においては名詞に対する統語的位置として表面化している (*Juan es un viejo amigo / Juan es un amigo viejo*)。⁵ 品質形容詞の前位修飾と後位修飾の解釈の違いについては膨大な先行研究があるが、主なものを以下にまとめる。

(6)

	前置形容詞 (<i>viejo amigo</i>)	後置形容詞 (<i>amigo viejo</i>)
Bello (1847)	説明的	明示化・特徴付け
Seco (1954)	非制限的	制限的
Klein- Andreu (1983)	非対比的	対比的
山田他 (1995)	主観的・非制限的・比喩的 抽象的・数量的	客観的・制限的・本来的 具体的・非数量的
GDLE (1999)	内包的	外延的
Demonte (2008)	非制限的	制限的
RAE et al. (2009)	非制限的	制限的

ここで注目したいのは、後位修飾では形容詞は常に項を要求する述部として解釈され、その項を名詞が埋めるという構図になっていることである。⁶ この際、後位修飾の形容詞は述部として、より動詞的な機能を果たしているといえる。英語などではこの解釈の違いは統語的には表面には表れていないが、スペイン語ではより動詞に近い、叙述による修飾関係と、それ以外の副詞的な修飾関係とが語順

によって明示的に区別されている。つまり、スペイン語の名詞内修飾における形容詞の二つの位置は、形容詞の意味解釈の流動性が顕在化したものであると考えられる。

第二に、形容詞が名詞に近い性質を示す、形容詞の名詞化の例を見てみよう。スペイン語では形容詞を名詞化する際にいくつかの手段が存在する。例えば RAE et al. (2009)では総称的な文脈において、形容詞は、複数形(*Esto no es cosa ni para tacaños ni para cobardes*)、定冠詞を伴った複数形(*los felices, los débiles*)、または単数形(*el mentiroso, el pesimista*)で名詞化されるとしている。さらに総称的以外に照応的な文脈でも品質形容詞の名詞化は可能である(*En la calle Caracas vivía un hombre que amaba a una rubia*)。英語にも総称的な解釈での、定冠詞を伴う形容詞の名詞化は可能であるが(*the rich, the poor*)、照応的な場合は必ず代名詞が必要である。スペイン語などで観察される、形容詞の照応的な名詞化は名詞脱落構文(noun-drop construction)とも呼ばれる(Snyder et al. 2001)。

(8) a. La camisa que quiero comprar es la \emptyset roja.

b. The shirt that I want to buy is the red *(one).

c. watashi-ga kai-tai syatsu-wa akai-*(no) da.

(8a)では冠詞の後に名詞 *camisa* が省略されているが、実質的には名詞句と同じ働きをしている。この例に対応する英語(8b)や日本語(8c)では、これらの名詞句で代名詞を省略すると非文法的になる。RAE et al. (2009)ではこのような形容詞の名詞化を語彙的なプロセスであるとし、統語的なプロセスである名詞省略とは区別している(*la gente conformista y la \emptyset emprendedora*)。また、このような柔軟性を Croft (2001)では形容詞から名詞への一方向の適応性(one-way flexibility)と呼んでいる。ここでの形容詞は、先行詞との性数一致により指示機能を持つに至っており、名詞句の主要部となる名詞が省略されても文法的となっていることから、これらは名詞的な振る舞いをみせていると言えるだろう。

第三に形容詞がコピュラを伴い述部として機能する例を見てみよう。スペイン語には従来二種類のコピュラがあるとされているが、そのどちらと共起するかで形容詞の解釈が変わる例がある。

(9) a. María es / está aburrida. マリアは退屈な人だ／退屈している

b. María es / está callada. マリアは寡黙な人だ／黙っている

c. María es / está lista. マリアは利口な人だ／準備ができている (山田他 1995)

これらの意味の対立は元来、半永久的性質か一時的状態かの違いで説明されることが多かった。しかしながらこの説明には問題も多い(*El conserje fue muy amable conmigo esta mañana, Está muerto*)。RAE et al. (2009)では、*El muchacho es alto* では、*alto* は永久的かどうかということよりも、主語自身の特徴として付与される(比較的安定した)属性を、*El muchacho está alto* では、話者が主語に対して持っていた印象や知識からの変化(思っていたよりも背が高くなっていた、etc.)が含意され、ただの状態というよ

りは、何らかの変化結果としての状態であるとされている。そもそもコンピュータの基本的意義は「A=B」という図式を成り立たせること、カテゴリー内のメンバーであることを示すことなどであり、それ自身には時間的な枠組みは想定されていない。つまり、形容詞が変化結果として *estar* と結びつく時、Givón (1979)の挙げた時間的安定性のスケールにおいて、*estar*+形容詞は、“動作・出来事”としての動詞により近いものなる。(9)の例は、先に見た形容詞の前位・後位修飾の場合と同様、より動詞的な解釈の違いが、共起するコンピュータによって顕在化されている例といえる。⁷

その他、スペイン語の形容詞は、直接的に前置詞(句)の補部となることができたり(*No hay nada de nuevo, La suspendieron por muy traviesa, De joven vivía en un pueblo*)、結果相の形容詞が英語の分詞構文のように独立して用いられったり(*Llena la taza, el camarero se retiró*)と、形容詞はそのプロトタイプ的な意味・機能の他にも名詞的、動詞的な機能も持ち、スペイン語では、それらが明示的に統語構造に反映される場合がある。以上、ここまではスペイン語の形容詞の流動性とその統語的な具現化を概観した。次章では日本語においても、形容詞が名詞と動詞との間で中間的な特徴を併せ持つことをみていく。

5. 日本語の形容詞カテゴリー：動詞の亜種か名詞の亜種か？

日本語の形容詞は、伝統的に「用言」に含められ、それ自身義務的な活用を持つ。⁸ 英語やスペイン語などの形容詞がコンピュータを介して述部となるのに対し、日本語の形容詞は単独で述語となれる、より動詞的なものであるといえる (cf. (5)のユラク語)。⁹ Dixon (1982)では、形容詞と動詞の違いは認めるとしても、日本語の形容詞が活用のパラダイムを持ち、述部としてコンピュータを必要としないこと、英語の形容詞の七つの典型的な意味が名詞や動詞で表されることが多いこと (人間の性向(human propensity)は名詞で、身体・物理的特徴(physical property)は動詞として)、さらに日本語の形容詞は代名詞や前置詞と同様に閉じたクラスを成し、生産性がないことなどから、日本語の形容詞は (意味的には英語などの形容詞に対応する) 動詞の下位クラスであるとしている。

Dixon(1982)が検討した日本語の形容詞は、「赤い」「堅い」「寒い」など基本形 (=終止形) がイで終わる狭義の形容詞(イ形容詞)であるが、他に基本形がダで終わるもの(「きれいだ」「美人だ」「静かだ」)を形容動詞(ナ形容詞)とするのが学校文法、国語教育で一般に使われる伝統的な用言の区分である。日本語の形容詞と形容動詞は、段階性を持ち、程度表現と共起し、名詞を限定修飾し、対格標示(ヲ)が付かない等、基本的な意味・機能の特徴を共有してはいるが、形容動詞はしばしば名詞+「ダ」と分析され、実際の活用はコンピュータである「ダ」が担っている。つまり形容動詞と名詞+「ダ」の活用パラダイムの違いは実質的には連体形だけにとどまっており、ここから形容動詞を日本語の品詞として認めるかどうかは研究者によって異なる。例えばパラダイムだけを見れば形容動詞にあたる品詞はないとする立場(山田文法や時枝文法など)や、意味機能の共通性を重視すれば、パラダイムの違いは形態的な問題に過ぎないとし、形容動詞を形容詞に含める考えもある(Ohkado 1991, Nishiyama

1999)。

形容動詞を立てる立場でも、活用を認めるかどうかで意見の対立が認められ、例えば Backhouse (2004)は活用の有無から形容詞を活用形容詞、形容動詞を非活用形容詞として区別し、形容詞はより動詞に近く、形容動詞はより名詞に近いとしている。¹⁰ ただし、形容動詞は次の点で名詞+「ダ」と異なる。第一に形容動詞から活用語尾を取り除くと(「静か」「きれい」、これだけでは自立した単語とはならない。つまり名詞はそれ自体が自立的であるので文の項(主語・目的語)となれるが、形容動詞語幹はなれない(*きれいはい世界共通だ)。また、名詞には度合いを表す程度表現がつけられないが、形容動詞にはつけられる(彼女は幾分きれいだ/*彼は少し学生だ)、などがある。

形容詞と形容動詞は、意味については共有する部分が多いが、述部として機能する際の活用という観点からみると、動詞と名詞のちょうど中間に具現化しているといえるだろう(動詞>形容詞>形容動詞>名詞)。また、名詞修飾の生産性という観点からすると、歴史的に日本語の形容詞は閉じたクラスを成すため生産性がない。これは終止形が「～イ・シイ」となる形容詞がもつばらやまことば(和語)によって賄われていたことによる。その後、語彙の不足から語種を問わない形容動詞が登場し、和語以外にも漢語、外来語にも広く造語され使用されている(明らかだ/安全だ/エキゾチックだ)。また、現在では名詞に直接「ナ」をつけて形容詞の機能を担わせる用法も現れてきている(ブルーな日、神戸なお店、問題な生徒)。ここから名詞修飾の生産性は名詞+ナ>形容動詞>形容詞という段階性をみせる。生産性が一番高いのは名詞+「ナ」であろうが、実際にその語が認められて使用に至るかどうかは別問題であろう。以上、ここまで日本語の形容詞・形容動詞が述部として機能する際、そして名詞修飾の生産性において、動詞と名詞との中間に展開していくことをみた。

6. 言語獲得研究への示唆

類型論は人間の言語の普遍性と、言語間の異なりの範囲を規定することを目的とする。言語はそれが人間の言語である以上、その根底に統一性を持ち、さらに表面上観察される多様性は、全くランダムでバラバラなものではなく、その異なりには一定のパターンが見られる (Greenberg 1966, Comrie 1976, 1985, 池上 2000, ウェイリー 2006, 堀江 2009, etc.)。しかしながら、人間言語の普遍性と多様性に迫るアプローチは他にもいくつかある(機能主義言語学、認知言語学、生成文法理論など)。この内、生成文法理論に基づいた言語獲得研究では、言語の普遍性を UG、多様性をパラメーター(とその値)とする前提に立ち、個別言語の相違や言語獲得における中間段階は UG にその成り立ち方を制限されるパラメーターの存在によって説明されうるとしている(村杉 2008)。これらの各パラメーターには幾つかの値があり、子供は UG と、後天的に取り込まれる経験の相互作用の産物として言語を獲得していくのである(大津 1995)。その際、入力となる個別言語の非プロトタイプ的な特徴によって、パラメーターの値が誤設定され、文法的な「誤り」が産出されることがある。類型論は、言語獲得研究におけ

る子供の文法的な「誤り」やパラメーターの誤設定を誘発するような原因（入力としての個別言語の多様性）を解明する手段として有効であり、この意味で、両者は互いの成果を取り込む形で発展していくことができると思われる。

子供はいつ、どのようにして母語の品詞体系を獲得するのであろうか。おそらく、子供は品詞のプロトタイプを手がかりに、ある語の品詞を決定してゆくのだろう。例えば、ある語が冠詞などを伴っていたり、文における項として機能していれば、子供はそれを名詞と範疇化していくが、もし入力となる経験に、品詞のプロトタイプ以外の情報が多く含まれれば、その範疇化はより難しくなり獲得が遅れたり、誤範疇化したりといったことが考えられる。例えば、日本語で色を表す語には、名詞の「赤」と形容詞の「赤い」などがあるが、これらは統語的な分布も非常に似ている（述部：これは赤い・これは赤だ、名詞修飾：赤い鉛筆・赤鉛筆）。これらは子供の形容詞の獲得に何らかの影響を与えたと考えられる。例えば、日本語を獲得中の子どもには、一歳から四歳という長期間にわたって、以下のような名詞句内での「の」の過剰生成が見られ、それぞれ日本語の「の」の三つの機能と対応している(Murasugi, et al., 2009)。

(10) a. 代名詞の「の」：ほわし（＝お箸） おおきい*の ほわし (2;1)

あむな（＝はるみ）、ちいちゃい*の (2;1)

b. 属格の「の」：まあるい*の うんち (2;0)、おおきい*の さかな (1;8)、新しい*の かみ (1;11)

白い*の ごはん (2;0)、小さい*の ブーブー 通った (1;11)

c. 補文標識の「の」：ゆうたが あしよんでる*の やちゅは これ

これ(2;3)、枯れてる*の 花だよ (2;2)

えみちゃんが書いた*の シンデレラ (2;11) (Murasugi, et al., 2009)

ここで注目するのは第二段階の属格の「の」である。子供はこの時期これらの形容詞を名詞と誤範疇化し、名詞との間に属格を挿入してしまうのである。筆者の長男は2歳6ヶ月のころ、逆に名詞を形容詞と誤範疇化し、「しろくるま（白い車）」「あかくるま（赤い車）」「パンくるま（パンを運ぶ車）」と発話していた。他にも、Murasugi et al. (2009)では同じ時期に形容詞を名詞と混同した例として、格助詞を伴った例（*ちいちゃいがあつて、*まあるいがあつて）や、接続詞を伴った例（*黄色いと、*赤いと）、動詞の項になっている例（*小さい買うてや）などが見られることを報告している。

同様に Waxman and Guasti (2009)では、スペイン語、イタリア語と英語の、形容詞の獲得過程における、新出形容詞の獲得について比較している。先に見たように、スペイン語の形容詞は修飾する名詞との性数一致が義務的であるため、名詞脱落構文を許す (*el rojo ø*)。このため冠詞+形容詞は、“その赤いの、赤いやつ”といった、照応的に用いられ、より名詞に近い用法となる。さらにこの構文が入力となる母語に遍在的に見られることから、スペイン語話者の子供は結果として形容詞と名詞との切り

離しが難しくなり、英語圏の子供たちよりも形容詞の拡大使用が可能になる時期が遅れてしまうとされている(英語話者: 21-23 ヶ月、スペイン語話者: 23-29 ヶ月)。以上、これまでみてきたことは日本語やスペイン語の形容詞の例であるが、通言語的にも形容詞は、名詞や動詞と比べて獲得が遅れ、初期語彙における割合も低い(9%前後)とされている。¹¹ これは個別言語における形容詞の具現化の多様性が、子供の語彙獲得過程に発達的な影響をもたらすことを示す例であると考えられる。

7. まとめ

本稿では、形容詞の類型論的な流動性を品詞のプロトタイプ理論から検討し、スペイン語・日本語の形容詞もそれぞれ名詞と動詞との間で揺れるカテゴリーであり、プロトタイプ的な特徴の他に、名詞的・動詞的な具現化もあることをみてきた。つまり形容詞は通言語的にも個別言語内でも二重の意味で流動的なのである。また、類型論的な品詞研究が言語獲得研究の分野においても有効な説明を提供する可能性があることを主張した。言語には、ランダムでも偶然でもない構造的パターンが繰り返し現れる。言語間に見られる表面的な違いは、池上(1983)のいう様に、ある一定の範囲内に収まる選択肢の違いとして現れてくる。この考えは、言語獲得研究における、幼児の中間言語やエラーにもあてはめることができる。つまり、幼児がある言語を獲得途中で観察されるエラーは、ある一定の期間と、ある一定の量が現われれば全くでたらめなものではなく、世界の言語の異なりの範囲内に必ず収まっているはずであり、それは池上(1983)のいう一定の範囲内の選択肢、生成文法におけるUGのパラメーターの相違の結果として捉えることができる(Hyams1986)。子供が形容詞を名詞と誤範嚙化してしまう理由は、形容詞のプロトタイプ以外の具現化が母語において偏在的であり、それらが子供の言語獲得の入力として取り込まれることから説明することができるだろう。その際、類型論における通言語的な品詞のプロトタイプの研究と、各言語の品詞体系の多様性という記述的研究は、子供の文法的な「誤り」を誘発する原因を突き止め、さらにパラメーターの解明をしていく上で、大きな貢献が期待される。世界の言語が表面的な違いを超えるレベルで見せる普遍性の研究において、今後類型論は、目的を一にしている他の関連分野と互いに相関し、研究成果を共有することで、発展していく可能性が多いにあると思われる。

¹ ただし、スペイン語、英語と異なり日本語の形容詞・形容動詞はすべて度合いを表すので、程度副詞「とても」と共起できる。

² プロトタイプを設定することによって捉えることのできる言語現象は品詞体系だけでなく、主語性、他動性、使役、色彩語や名詞句階層などがある。

³ 一方、プロトタイプは様々な要因の複合体であり、厳密な意味での定義とは言えないという批判もある。また、プロトタイプ以外の段階性の精緻化など問題も残されている。しかしながら Comrie (1989)の述べるように、人間の範疇化作用の少なくともある部分は、隣接する概念間の明確な境界によって行なわれるのではない。人間言語を記述する際に品詞という概念が必須であるのに言語間で共通の一貫した定義が難し

いとすれば、プロトタイプを中心とした段階性において各言語の記述を行なうことの意義は大きいだろうと思われる。

⁴ 英語においては不定代名詞(*something, anything*)の後、補部を伴う形容詞の時(*a property inherit in man*)、いくつかの(外国語由来の)例外(*the court-martial, the sum total, the body politic, etc.*)以外、後位修飾は通常許されない。ただしステージレベル述語と呼ばれる一時的な性質、状態を表す形容詞の場合は単独で後位修飾が可能である(*the rivers navigable, students present, etc.*)。中島(2004)はアスペクト句とN移動を仮定することでこれらの後位修飾の派生も統一的に説明しようとしている。

⁵ 日本語ではこの例での曖昧性は異なる語彙を使うため観察されない。例 古い友人 vs. 年老いた友人

⁶ 動詞も形容詞も、その意味解釈が行なわれ文の中で機能するためには必ず(一つ以上の)項を要求するという点で、概念的に非自立的であるという共通点がある(Beck2002)。ただしその違いはそれらがイベントなのか特徴・特性であるか、アスペクト的に量化できるか、それとも時間的に不変的かどうかなどが挙げられる。

⁷ 英語においてこの意味の対立は共に *be* 動詞で表されることもあれば(*She is a quiet child / She's just very quiet in front of strangers*)、現在分詞と過去分詞で表されることもある(*She is boring / She is bored*)。

⁸ 学校教育では形容動詞は品詞の一つとされているが、文法研究や日本語教育では形容動詞を品詞とは認めない立場もある。結果として日本語の述語は名詞述語、動詞述語、形容詞述語の三つになる。

⁹ 形容詞と動詞の活用の違いとしては、まず終止形が形容詞は「イ」、動詞は「ル」となる。現代語では形容詞の終止形は連体形と合流して「とても美しい/美しい花」のように語尾の形が一致するが、文語法では「いと美し/美しき花」となるため、活用の基本形はク活用・シク活用とされる。また、形容詞は基本的に時とは関係ない現状認知の表明でしかないために、時制を伴った形にするためには状態性の動詞「ある」を借りて、カリ活用にしてから時制の語尾をつける(暑い+ある+た→暑くある+た→暑くあつ+た→暑かった)。さらに日本語の形容詞には丁寧形の活用がなく、共起するコピュラの方を丁寧形にしなくてはならない。

¹⁰ ただし加藤(2009)では形容詞の活用パラダイムを再考することで、形容詞もより名詞に近くなると主張し、形容動詞だけでなく形容詞も名詞の亜種として捉えられるとしている。

¹¹ Waxman and Lidz (2006)は、生後 21 ヶ月の子供に実験を行なっている。彼らはまず子供に「黄色いへび」の絵を見せ、次に、赤、青、黄色のへびの絵の中から「黄色(いもの)」はどれかとたずねる。すると子供は正しく「黄色いへび」を選べるが、次に黄色い犬、赤いへび、青い猫の絵の中から「黄色(いもの)」を選ばせると、赤いへびを間違えて選んでしまう。つまり、「黄色」は「へび」とは切り離されておらず、形容詞は共起する名詞の一部と解釈されてしまうのである。

主要参考文献

Dixon, R.M.W. (1982) *Where have all adjectives gone?*, Mouton, Berlin

Murasugi, et al. (2010) "A Trihedral Approach to the Overgeneration of "no" in the Acquisition of Japanese Noun Phrases", in press.

Real Academia Española, et al. (2009) *Nueva gramática de la lengua española*, Espasa, Madrid

Snyder, William, et al. (2001) "Agreement Morphology and the Acquisition of Noun-Drop in Spanish", *Language Acquisition* 9 (2), 157-173

Waxman, R. and M. T. Guasti (2009) "Nouns, Adjectives, and the Acquisition of Meaning: New Evidence from Italian-Acquiring Children", *Language Learning and Development* 5, 50-68

山田善郎, 他. (1995) 『中級スペイン文法』白水社, 東京

横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における女子「ノ」の誤用」『発達心理学研究』第一巻, 第一号, 2-9